

はせがわ かつのり
氏 名 長谷川 勝紀
学 位 博 士 (歯学)
学位記番号 新大院博 (歯) 第 35 号
学位授与の日付 平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学位規則第 3 条第 3 項該当
博士論文名 歯根完成歯の即時自家移植に関する臨床的検討

論文審査委員 主査 教授 齊藤 力
副査 教授 高木 律男
教授 林 孝文

博士論文の要旨

〔目的〕 歯の自家移植は機能していない歯を利用できることや、移植後に良好な治癒が得られれば正常歯と同様の機能をはたすことが可能であることから、臨床的に有用な治療法である。そのため歯の自家移植に関する研究はこれまで数多く報告されているが、以前は歯根未完成歯症例の報告が多くその成功率も 80～100%と高いのに対し、歯根完成歯症例の成功率は 25～100%とさまざまであった。移植後の予後に重大な影響を及ぼした歯根吸収メカニズムの解明が進むにしたいが、歯根完成歯症例でも 80～90%の安定した高い成功率の報告がみられるようになってきたが、多数の歯根完成歯移植症例において臨床的に評価した報告は少なく、特に成功しなかった症例についてその原因を考察した論文はきわめて少ない。そこで今回われわれは歯根完成歯の即時自家移植において良好な治癒に至らない原因やそのメカニズムを検討する目的で、新潟大学医歯学総合病院「歯の移植外来」で施行した症例について臨床的に検討した。

〔対象〕 対象は 1997 年 1 月から 2001 年 11 月までの 4 年 11 か月間に新潟大学医歯学総合病院「歯の移植外来」で歯根完成歯の即時自家移植を施行した 230 例のうち、3 か月以上の経過観察を行った 191 例 207 本であった。

〔方法〕 歯の移植手術および術後処置は Andreasen の方法に準じて行った。術中、移植歯の萌出状態、歯根形態、歯冠および歯根の長さ、歯根膜付着状態、歯周ポケット深度、受容部の移植窩形成前後の骨と歯肉の状態を記録した。術後 1 週目に抜糸、3 週目に失活抜髄と水酸化カルシウム製剤を用いて仮根管充填を行った。術後は移植歯周囲歯肉の状態、歯周ポケット深度、動揺度、打診痛、打診音、不快症状の有無を診査し、デンタルエックス線写真で歯根膜腔隙、歯槽硬線の状態、歯根吸収の有無、歯槽骨の状態を評価した。移植歯が抜歯、脱落に至った症例を抜歯・脱落歯症例とし、それ以外の症例を生着症例とした。さらに生着症例

を 2 群にわけ、臨床的あるいは放射線学的に異常が認められた症例を部分的異常症例とし、特に異常が認められなかった症例を経過良好症例とした。

〔結果と考察〕 移植歯 207 本のうち生着症例が 190 本 (91.8%)、抜歯・脱落歯症例が 17 本 (8.2%)であった。生着症例のうち経過良好症例が 160 本 (77.3%)、部分的異常症例が 30 本 (14.5%)であった。抜歯・脱落歯症例の原因としては初期の創傷治癒不良が最も多く、次いで付着の非獲得と骨新生遅延、歯根吸収、歯根破折、上顎洞炎、移植歯短根、う蝕であった。創傷治癒不良症例の原因として移植歯側の因子としては、移植歯が受容部より大きいこと、歯根が肥大、湾曲するなどの形態異常があることがあげられ、受容部側の因子は主に移植窩の骨欠損が大きいことがあげられたが、これは術前に適応症の検討を十分することで防ぐことができると思われた。付着の非獲得の原因としては、健全な歯根膜付着量の不足、歯周組織に炎症のある症例では細菌の存在と健全歯根膜の欠如が考えられた。歯根吸収では置換性吸収と歯根頸部吸収が抜歯に至っていたが、炎症性、置換性吸収は術後 4.5 か月目頃に発現したのに対し歯根頸部吸収は 3 年 11 か月目と遅く発現したため、より長期の経過観察が必要と思われた。また炎症性吸収はそれが原因で抜歯に至る症例はなかったが、他のタイプの歯根吸収を併発することがあり長期的予後の危険因子になりうると思われた。

審査結果の要旨

歯の移植の歴史は古く、日常臨床で選択されやすい治療法のひとつではあるが、歯の自家移植に関するこれまでの報告は移植歯が歯根未完成歯、あるいはさまざまな歯根形成段階の歯が移植歯であることが多く、そのため予後や危険因子に関する検討は移植後の歯根形成度、歯髄生着、歯根吸収などが中心になっていることが多い。これに対し移植歯が根完成歯のみである報告は少なく、その予後や危険因子に関する検討もさまざまであるため、予後に影響を及ぼす因子についての検討はいまだ十分ではない。本研究では、移植歯の対象を歯根完成歯に限定して臨床的に検討し、予後に影響を及ぼす因子について検討したものである。

本審査では歯根完成歯の移植歯における根未完成の意義、移植後のトラブルとその対策について、移植後の根管治療の意義、移植歯と受容部の状態と予後との関係について、歯根頸部吸収の発生メカニズムについてなどについて質問を行ったが、いずれも妥当な回答が得られた。また、この研究は日常臨床で選択されやすい歯根完成歯の移植において、術後のトラブルと予後に影響を及ぼす因子との関連性について検討しており、術前の適応症判定から術後の経過観察までの具体的な対応策が示唆されているため価値あるものと認めた。